



次の戦争で失われる命

ブレンダン・ダディーは言う。

「平和な一日によって一人の命が救われる。」 (*Every day of peace is a life saved.*)

玉葱はいくつもの皮からできている。これは人の性格についても言うことができる。
あなたをつくりあげる、幾枚もの層は何でできているだろうか？

人はあなたを「日本人」、「外国人」、「都民」、「県民」、「神道の信者」、「仏教徒」、「キリスト教徒」、「無神論者」、「中道派」、「過激派」、「いい人」、「悪い人」、「変わり者」、「〇社の〇さん」、「〇家の〇さん」というような枠にはめて理解しようとする。しかし、それで本当にあなたを理解することはできるだろうか？

自分たちのこととして考えると、答えは単純明快。もちろん、そのような国籍や人種、宗教などの枠だけで人を理解することは到底出来ない。すべての個人ひとりひとりが異なる複数の枠に、いろいろな形で、そして、いろいろな度合いで所属している。

それでは、ここで質問。

あなたはどこに所属していますか？

あなたの居場所はどこですか？

あなたが一番、安心できるのはどこですか？

それが無いと生きられないもの、それを守るためには、闘う価値があるものは、何ですか？

第二次世界大戦中、日本軍と戦った元英兵の故フィリップ・メリンズ氏がシンポジウムにて言っていたことがある。戦争があそこまで醜いものになったのは、「敵を粹にはめていくことで、相手の人間性を奪っていったからである(dehumanising)」と。

もちろん、これが戦うことを可能にする唯一の方法であったことは容易に想像がつく。しかしながら、もし「敵」と効果的に戦うことを望むのであれば、まず、「敵」がなぜ戦っているのかを理解することが決定的に重要である。相手が何のために戦い、何が目的で、何を考えているのか。そうしないことには、終わりなき、目的なき復讐戦の泥沼に入ってしまう。

もし我々が植民地的な「勝者一人占め」の方法を信じるのであれば、利権がぶつかったときの解決法は軍事的な戦いが唯一の方法なのかもしれない。しかし、我々の大半は先人による過去の植民地時代の過ちから学んでおり、同じ過ちを繰り返したくないと思っている。

「敵」が何を本当に求めているのかを分かっているならば、必ず合意に至ることのできる点があることを、歴史は教えてくれている。その点が合意されれば、戦いを続ける必要はなくなる。

また次に戦争を始めた場合、失われていく命がある。その人はどんな人だろうか。どんな顔をしているだろうか。想像してみようではないか。誰も考えたがらないその顔が、私の顔、そして、あなたの顔かもしれないのだから。なぜなら、今、攻撃を受けている人々の頭の中で、我々は人間性が奪われた「敵」となり、「復讐の対象」になっているかもしれない。

濱 美恵子 (mh@komatsuresearch.com)